

中国はその長大な歴史において対等の国家を周囲に接することはなかった。中国はそれ自体が一つの巨大な国家でありつづけた。黄河中流域に広がる「中原(中華)」と称される地域が文明の中心域であり、この中心域をチベット族、モンゴル族、ウイグル族などの国内異民族が住まう藩部が取り囲み、その外方にくつもの夷狄が位置するという構図であった。

### 国民国家の認識生まれず

文明の中心域たる中原は一つの超越的な存在であり、それゆえ世界が諸国家の相紡ぐ国民国家体系のもとにあるという認識が生まれることはなかった。中国の王朝史を一貫して流れてきた觀念の中心が「天」である。宇宙のすべて、

神羅万象を主宰するものが天であり、「天が下」にある万物の統治を委ねられたものが「天子」すなわち皇帝であった。中国が巨大な皇帝権力の国であるというイメージは、そうした觀念にもとづいて形作られた王朝の連続史であったことに由来する。

# 王朝国家体制を継続する中国

中華と言ひ夷狄と言つからには、これらが価値の上下関係のもとにおかれてきたことを暗示する。中華が価値の頂点に位置し、藩部と夷狄はそれより低い価値の周辺部を構成するものとして捉えられてきた。中華と藩部は「朝貢」関係にあった。一方が他方を徳のすべてを有するものとして崇め、その見返りに貢物を受け取るという主従関係であった。この主従関係を容認するのであれば、夷狄もまた中華と朝貢関係に入ることを許された。

中国に王朝国家が出現し、これが儒教というイデオロギーによって理論武装されたのは漢代である。以来、王朝国家は19世紀中葉のアヘン戦争によって打ちのめされるまで連綿として紡がれてきた。中国の伝統的な王朝国家体系が西欧の国民国家体系の国家と干戈を交え、これに無残にも敗北を喫したものがアヘン戦争であつた。

## 正論



拓殖大学顧問 渡辺 利夫

た。加えて、長江流域の各地で蜂起した宗教集団の反乱の收拾過程で清朝は急速に衰退していった。

### 専制的な権力集中へ

さらに清朝は日清戦争での敗北により致命傷を負い、各省の独立が相次ぎ、これらを糾合すべく孫文を臨時総統とする中華民国政府が樹立された。この「辛亥革命」により最後の王朝国家たる清朝はついに崩壊のやむなきにいたつた。

アヘン戦争後に中国の改革派指

採用し、西洋の技術・学問をきわめて積極的に導入した。日本のこの文明開化に範をとる「変法自強」運動が中国の改革派の間でにわかにはびきりこつたものの、保守派の反撃にあつてこの運動も頓挫を余儀なくされた。

日中の近代化は明らかにここで分岐してしまつた。その後の中国は、中華民国崩壊、国共内戦、中華人民共和国成立、大躍進政策、文化大革命、天安門事件と激動を続けた。鄧小平の時代に至り顕著な経済成長を実現し、経済大国と同時に軍事大国へと変じたものの、習近平による極度に専制的な権力一極集中が始まり、この体制はますます強化の方向にある。

### 巨大国家の深刻な症状

国民国家とは、確定した領土をもち、その領土に囲まれた国家内部の国民を主権者としてまとめあげた政治体制のことである。しかし中国は強まる習近平への権力集中の専制政治のもとで、国民国家からは遠ざかりつつある。清朝崩壊から百十余年、中国は再び、しかも一段と強大な王朝国家として

採用し、西洋の技術・学問をきわめて積極的に導入した。日本のこの文明開化に範をとる「変法自強」運動が中国の改革派の間でにわかにはびきりこつたものの、保守派の反撃にあつてこの運動も頓挫を余儀なくされた。

たち現れている。

問われるべきは、この王朝国家体制の持続可能性である。現在の国際社会は、多くの主権国家がそれぞれ自国の利益を求め、他国の優越性を排除し、国家間の勢力均衡を図ろうと努めている。勢力均衡への志向性の強いこの国際社会において、王朝国家体制はきわめて攪乱的な存在だといわねばならない。

南・東シナ海での中国の海洋行動はいささか常軌を逸している。フィリピンなどの小国に対してさえ振るわれてはいるものの、威圧的な行動をみていると、中国は国家関係を対等の国家がその存立を求めて競い合う勢力均衡の場としてはみなしてはおらず、逆のみずからを中心域とし、他方を周辺域としてみる「天下」概念のお強い信奉者であるかにみえる。中国はみずからの海洋行動が周辺諸国を怯えさせるという事実への感受性を明らかに欠いているのであり、エドワード・ルトワック氏が「巨大国家の自閉症」と呼ぶところの深刻な症状がこれである。(わたなべ としお)